タタラ場の痕跡を求めて①

戸谷　克己　著

飯能の中沢という地区の平沼氏の宅内に、珍しい木彫りの三体の鍛冶人形とそれを見下ろすように座っている金屋子（天目一箇）神の人形を祀った、立派な金山様（鍛冶屋神）の祠がある。金山様とは、「古事記」や『日本書記」に出て来るイザナミノミコトがイザナギノミコトと交合して、この世に存在する様々な事物や事象に関する神々を産み出した最後に、火の神・迦具土（カグツチ）を産んで、その火に自分の陰部（ホト）を焼かれて死んでしまうことになるのだが、その時苦しんで吐いた吐瀉物から生まれたのが、金属の精錬や鍛造に関わる神である金山彦・金山姫の二神の総称のことである。その金山様の祭礼（大祭）が、旧暦の7月7日、新暦では一月遅れの8月7日に行われるとのことで、中沢の平沼宅を訪ねていった。

旧暦の7月7日の七夕の日に祭礼を行うのは、古代においては、地中の埋蔵物の金属は夜空で金属のようにキラキラと光り輝いている星々が降って来て地中で育ったものと信じられており、山師（鉱山師）や製鉄業に携わる人達は、妙見様（北極星）や虚空蔵菩薩（金星）を自分達の神として崇めていたのである生憎、家入が留守であったので、今度で二度目になるのだが、祠のある裏手に回って祈りを捧げた後、祠と祠の中に納められている鍛冶人形と金山様の人形を、しみじみと拝見させてもらった。

三体の半身裸の鍛冶人形の内、前面の左側の赤く彩色された村下（親方）らしく見える一体の人形は鉄鋏で挟んだ鉄塊を赤々と燃える火床に入れて熱しようとしていて、その右側の青く彩色された弟子と思われる一体の人形はその鉄塊を打つ大槌を持って横で待機しており、それらの背後にいるもう一体の桃色に彩色された人形は直方体の黒く塗られた大きな箱形の輪（フイゴ）のビストンの柄を押して炭火を熾すための風を送り込もうとしているように、作られている。そして、それらを見守るように、台座のようなものの上に渡された床の上に、宝珠を抱えた赤い袈裟のようなものを掛け結珈欧坐した金山姫を思わせる人形（この人形は顔が白く彩色され髪を御垂髪―おすべらかしにしていることから、女性であると思われる。）が鎮座している。

この祠から発見された明和七（一七七〇）年と天明八（一七八八）年に二枚の本板に記された由緒書きによると、これらの鍛冶屋様を象った人形は、元々は平安時代末期の天永二（一一一一）年に御神体として描かれた絵像が歳月の経過によってボロボロになってしまったために、江戸時代の明和七年に裏打ちをして補修を図ったが、天明八年にそれらを絵像に基づいて新たな木像に刻んで奉納したものが、現在まで鍛冶屋様として継承されてきたということが解るのである。

この絵像というものは、それらの鍛冶人形と比較して、近郊の上名栗の地の池田家に伝来して来た数百年も前に書かれたものと思われる「鍛冶絵像」に、かなり近似していた様相をしていたのではないかと思われる。

（戸谷）